

韓

恣

韓

愈

清水茂注

昭和三十三年一月二十日 第一刷発行 ©

定価二二〇円

注 者 清^{しみず} 水^{みづ} 茂^{しげる}



発行者 岩波雄二郎
東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地

印刷者 山田一雄
東京都青梅市根ヶ布三八五番地

発行所 岩波書店
東京都千代田区
神田一ツ橋三ノ三
株式会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

解説……………	三	今の晨起つことを成さず……………	五
北極 李観に贈る……………	九	秋の夜は晨なるべからず……………	六
酔つて東野を留どむ……………	三	卷卷たり地に落つる葉……………	三
張籍を調る……………	二	霜風梧桐を侵し……………	六
盧全に寄す……………	三	暮れの暗に來客去つて……………	六
秋懷の詩十一首……………	四	鮮鮮たり霜中の菊……………	七
窓前の両好樹……………	四	琴操十首……………	七
白露の百草に下れば……………	五	将帰操……………	七
彼の時何ぞ卒卒たる……………	五	猗蘭操……………	七
秋の氣は日びに惻惻として……………	五	龜山操……………	六
離離として空ろなる悲しみを掛け……………	五	越裳操……………	七
		拘幽操……………	九

岐山操	八
履霜操	八
雉朝飛操	八
別鵠操	七
殘形操	六
石鼓の歌	六
華山女	一〇六
木居士に題す二首	一三
火の透り波の穿つて春を計らず	一三
神と為ることは詎ぞ溝中の断に比せん	一三
左遷されて藍関に至り 姪孫湘に示す	一四
武関の西に配流の吐蕃に逢う	一七
楚の昭王の廟に題す	一八
滝吏	一九
臨滝寺に題す	二三

児に示す	一三
春に感ず三首	一三
偶たま坐す 藤樹の下	一三
黄黄たり蕪菁の花	一四
晨に百花の林に遊べば	一五
南溪に始めて泛ぶ三首	一七
舟を榜さす 南山の下	一七
南溪 亦た清駛	一五〇
足弱くして歩むこと能わず	一五
南山の詩	一五
年譜	一八九
跋	二〇
略 図	二〇
吉川幸次郎	二〇

解 説

一

散文の大家として有名な韓愈は、詩においても一方の大將であった。

中国の詩が、もっとも高く芸術的完成に達したのは、唐代でも、盛唐といわれる玄宗皇帝の時代（七一
二―七五六年）であり、その完成者は、いうまでもなく李白（七〇一―七六二年）・杜甫（七一―七七
〇年）の二人である。

唐代の詩は、盛唐時代の末に起こった安史の乱（七五五―七六三年）による社会変動にもなって、傾
向が変化する。前代六朝（三世紀―六世紀）隋・初唐（七世紀）を通じて徐々に生育して来た豊満華麗な
スタイルは、李白において極点に達し、杜甫は新しく人間の現実を見つめる文学精神によって別の道路を
切り開いた。

盛唐につづく中唐（八世紀後半・九世紀前半）と呼ばれる時代は、杜甫によって開かれた新しい詩風が
継承され発展したが、この時代の代表的詩人こそ、韓愈（七六八―八二四年）と、もう一人は白居易（七
二―八四六年）とであった。韓愈は、杜甫の現実熟視の詩風のうち、個人的生活を写生しようとする面
をつきつめ、白居易は、杜甫の社会矛盾に対する批判の面を受けて、平易に人に説こうとする。

清の乾隆帝愛親覺羅弘曆（一七三六—一七九五年在位）は、唐宋の詩人六家の詩を選んで、「唐宋詩醇」を編したが、唐から選ばれたのは、李白・杜甫・韓愈・白居易の四人であった。その凡例にいう、「唐宋の人、詩を以て鳴る者、指は屈するに勝えず。其の卓然として名家なる者、猶数十人に減ぜず。茲に独り六家を取る者は、謂うに惟だ此れのみ大家と称するに足れり。大家と名家とは、猶大将と名將のごとし。其の体段正に自のずから同じからず。」と。韓愈は、李白・杜甫・白居易と並らんで、大将の風格あるものとされている。

二

では、韓愈は詩において、どのように先人の詩業を承け継ぎ、どのように発展させたであろうか。

先ず、韓愈は、杜甫から、個人の生活を見つめる態度を受けついで、徹底させた。徹底させたということとは、必ずしもより勝れているということではない。韓愈は、日常の生活の一こまを取りあげて、こくめに描写する。成功したときは、生き生きとした人間生活の面白みを写し出すが、時には、あまりにも散文的に過ぎることがある。韓愈は、杜甫よりも一層特殊な事件をとまなわなない日々の生活を描くのである。「酔って東野を留どむ」「盧全に寄す」「児に示す」は、その成功した一例といえよう。

また、韓愈は、李白のロマンティズムをも一部分受けついで。韓愈は、しばしば、李白以上に、宙を飛び、海に入り、神神とまじわる。がんらい、彼れは、想像による場面の構成力に富んでいた。詩でも、その空想力をたくましく馳せる。「張籍を調る」が、そうした好例である。

韓愈は、更に、李白・杜甫のほかに新しい道を求めた。それでこそ、一方の大将となり得たのである。

その第一は、散文と同じように、彼れの古代主義にもとづく復古の名のもとに、実は、新しい詩型を試みようとしたことである。彼れは、一句の字数に変化を持たせようと試みた。韓愈以前、李白・杜甫にも、毎句の字数の等しくない詩、例えば、李白の「蜀道難」とか、杜甫の「兵車行」のようなものがある。しかし、それらは、なお、七言を基調とするものであったが、韓愈は、三言・四言・五言・六言・七言・九言などの句をまじえ、その詩句の内容に依じてリズムを変えた。こうした試みがもっとも成功を収めたのは、古代伝説に題材を取った「琴操」十篇である。各篇ごとに詩型をかえ、素朴な語に、素朴な感情をこめたこの作品は、彼れの古代趣味と詩的精神のよく調和した代表作といえよう。

詩型に旧来の定型を破ってみようとした韓愈は、表現にも、新しさを求めた。韓愈の文学上の意見、特に表現の技術に対する態度は、彼れの次ぎの二つの語に要約される。すなわち、「唯だ陳言を之れ務めて去るのみ」(「李翊に答うる書」と「文従い字順やかに各おの職を識る」(「南陽の樊紹述の墓誌銘」)という二つの主張である。「唯だ陳言を之れ務めて去るのみ」とは、言い古された表現法を勇敢に打破し、新しく自分のことばで、自分の思想を、また自分の感覚を表現しようということである。しかし、そうした新しい表現が、もしひとりよがりであるなら、人には受け入れられまい。文学が、言語を使用する芸術である以上、その言語は、万人の使用する言語で、他人に理解され得るものでなければならぬ。また、たとい理解されるにしても、ひどくごつごつして、読者に抵抗を感じさせるものは、すぐれた文章技術であるとはいえない。そこで、第二の「文従い字順やかに各おの職を識る」という主張が必要になって来る。韓愈は、この二つをうまく調和させたがゆえに、彼れの詩文は、新鮮な感覚を与えるのである。韓愈の詩文には、他にほとんど用例を見ぬ、もしくは、韓愈がはじめて造語し、後世それを襲うて常套語化したよう

に思われる熟語が少くない。例えば、「南山なんざんの詩」や「秋懷の詩」の用語である。「南山の詩」の多様な形容、また「秋懷の詩」の自己の心情の表白に用いられた表現のうちには、他に用いられた例が多くな^く、韓愈が造語したのではないかと疑われるものがかなり存在する。しかも、それらのことばが、一方では、意味上からも音声上からも無理なく受け入れられるように造られていることに驚歎させられる。「秋懷の詩」中に見えることばに、次のようなものがある。「汲古きゆうこ」ということばは、古代を研究するという意味のもので、大変巧妙な造語であるといえよう。明末の蔵書家で出版者でもあった毛晋もうしん（一五九八—一六五九年）が、その書庫にこの語を用いて汲古閣と名づけているほど後には普遍化した語であるが、これが、韓愈によって造られたものようである。この「汲古」という語は、単に意味上からいって巧妙であるだけではない。汲と古との二つの文字は、音声上からいっても^ゝを語頭におく同じ子音のことばで、したがって「汲古」ということばは、いわゆる双声語なのである。また、「南山の詩」に見えることばでいえば、「通透つうとう」とか「深秀しんしゅう」という熟語がそれである。これらのことばも、韓愈が造語したか、もしくは、ひかえめにいっても、それまでは詩文に使用されなかった熟語であった。そして、これらも、「深秀」は^sをそれぞれ語頭子音とし、「通透」は^tをそれぞれ語頭子音とする二つの字から成る双声語なのである。そのほかに、「南山の詩」「秋懷の詩」に用いられている二字の熟語に、語頭子音を同じゅうする文字を用いる双声語、韻を同じゅうする文字を用いる疊韻語が、いかに多いか、もし読者が少くし注意を払えば、すぐ気のつくことであろう。韓愈の造語は、単に新奇を好むばかりでなく、「文従い字順おだやかに各おの職を識る」ことをも、十分考慮していたのである。そこにこそ韓愈文学の表現技術の優秀さがあるといえよう。

第三に、韓愈は、一つの事物を、種々な方面から見て、それを描き出そうとする手法を、詩に用いた。ある事物を、さまざまな方面から叙述しようとした美文が、「賦」といわれる様式のもとに、前三世紀ごろから行われていたが、韓愈は、本来感情を表白すべきものとされた詩に、賦のような叙述の形式を持ちこんだ。「南山の詩」は、その代表であるが、「石鼓の歌」などにも、そうした叙述が一部分にある。前述した人間の生活をこくめいに叙述しようとしたのも、この事物の姿をしつこく追いかけてまわそうとするのと、同じ精神にもとづくものなのである。

むかし、宋の黄庭堅（一〇四五—一一〇五年）は、「韓は文を以て詩と為し、杜（甫）は詩を以て文と為す」といった。これは、韓愈の事物をいかにありありと写し出すかに試みられた執拗さが、詩的であるよりも散文的であるということをいったものにほかならぬ。

三

韓愈は古代主義者であった。韓愈は、中国の伝統的倫理思想の儒教をふりかざし、中国の社会組織を破壊するものと彼れの考えた仏教道教をはげしく攻撃した。韓愈の代表的な論文「原道」がそれであるし、彼れの生涯の最大の事件も、「仏骨を論ずる表」を、時の天子憲宗皇帝（八〇五—八二〇年在位）に上つて、嶺南の潮州（今の広東省潮州市）に流されたことである。彼れは、散文だけでなく、詩でも、仏教道教を排撃する。「華山女」は、その一例である。「木居士に題す」もまた、同じように俗信に対する諷刺を含んでいる。

文学上においても、韓愈は、古代主義者であった。文学も古い精神を保持しているものこそすぐれたも

のとした。彼れが、友人孟郊（七五一—八一四年）の文学を高く評価したのも、「石鼓」の詩（秦の刻文）に対して絶讃を惜しまなかったのも、古代主義からであり、「秋懷の詩」も、古代憧憬を基盤として作られている。また、唐代の文学者では、李白と杜甫とを推尊し、その評論を、詩中に展開した。彼れが、「文を以て詩と為し」たといわれる理由の一つは、その詩の中に議論の要素が多く含まれるためでもある。「酔って東野を留どむ」「張籍を調る」「石鼓の歌」には、いずれも彼れの文学論が見られる。

韓愈は、新興地主階級の出身であったようである。彼れは、中央の大地主・貴族のように、手軽に地位を獲得できなかった。彼れは、同じような出身のものと手を結び、そのお互いの協力によって、新しい官僚集団をつくろうとした。韓愈の若い時の友人たちは、大ていは地方の中小地主出身の文人で、同じ階級のものという心易さから、一つの集団を作って、推薦しあった。李觀（七六七—七九五年）も、孟郊も、張籍も、そうした階級の人であった。また、盧仝も、そのうちに入れてよいであろう。韓愈は、そういう人たちに深い友情、また愛情を持っていた。彼れの詩には、そうした友情や愛情をうたう詩も多い。「北極」「盧仝に寄す」や「酔って東野を留どむ」は、その一例である。

最後に、韓愈も、詩人としてゆたかな情操の持ち主であったといいたい。「秋懷の詩」に見える感情の高まり、潮州に流謫される旅行中の作品の感傷、潮州流謫中の詩を含む晩年の詩に見える死へのおそれ、死に近くすっかり人世を解脱したような「南溪に始めて泛ぶ」の詩などは、その資質の十分あったことを示すものだといえよう。韓愈は、抒情詩に対してすぐれた能力を持っていなかったのではない。むしろ壮年時代には、文学革新への野心が、新しく珍奇なものへと彼れの眼を向けさせ、おのれの持つ抒情性をおさえていたのではあるまいか。それが、潮州流謫を機に、自然に流露したのではなからうか。韓愈の詩集

の大抵の注に引く「筆墨閒録」のことばどおり、「潮州以後の詩は、最も哀れ深い。」

四

韓愈のくわしい伝記は、年譜にゆずり、ただ彼れの文学生活に関連する要点だけを記そう。彼れは、代宗皇帝（七六二―七七九年在位）の大暦三年（七六八年）の生まれ。李白（七六二年死）杜甫（七七〇年死）と、ほぼ入れかわりであるのが興味深い。文学史上中唐といわれる時期は大暦に始まる。彼れが大暦初年に生まれたのは、杜甫一代が盛唐時代であるといつてよいのと同じく、象徴的である。

三歳で父韓仲卿を失しなつた韓愈は、長兄韓会（七四〇―七八一年）の世話になつたが、韓会も相当な文学者であつて、韓愈の文学の成就に対して或る程度の影響を与えたに違いない。なお、叔父に韓雲卿という人があり、唐代の散文を選んで編した宋の姚鉉（九六八―一〇二〇年）の「唐文粹」にその文が選ばれているほどであるから、この叔父からも文学上の影響があつたことと思われる。

韓会は、韓愈十歳のとき、宰相元載の大逆事件に連坐して、嶺南の韶州（今広東省韶関市）に流される。韓愈もこれに従つた。最初の嶺南行である。十四歳で兄がなくなり、宣城（今安徽省にある）の莊園にいたが、のち首都長安に出て進士の試験を受け、二十五歳で合格した。このとき李観、王涯（七六〇年頃―八三五年）が同時に合格、孟郊は落第した。

進士には合格したけれど、官につけず、地方の節度使の幕僚をしていたが、三十五歳のとき、国立大学なる国子監の四門博士になつて、正式の官吏としての第一歩をふみ出した。韓愈は、履歴中、国子監に係することが多いが、まず官吏としての第一歩が、それを暗示するかのごとくである。

翌三十六歳のとき、官吏を取りしまる監察御史となり、京兆の尹であった李実の暴政を弾劾したので、嶺南の陽山県（今広東省にある）の県令に流される。第二回の嶺南行である。韓愈の文学からいって、この陽山左遷が、一つの時期を劃するといえよう。これまでの作品は、習作であって、新しい文学を求めつつ、なお技術的には未熟であるように感じられる。

陽山などの地方官を三年ばかりして、三十九歳のとき、元和元年（八〇六年）に、権知国子博士として、中央にもどって来た。これも国子監の官である。四門博士より少し上ではあったが。

この元和元年から元和十四年潮州に流されるまで、元和年間十五年の大部分を占める時期が、韓愈の文学のもっともあぶらの乗り切った時期で、新しい形式と、高い調子の内容とが、よく調和し、自信を持って作られている。「南山の詩」「秋懷の詩」「石鼓の歌」などのすぐれた作品はこの時期のものである。

このあいだ、韓愈は、洛陽と長安の二つの都にあって、時には挫折しながらも、しだいに高い官吏の地位を占め、特に元和十二年（八一七年）、淮西の軍閥呉元済の征討軍の行軍司馬（副司令官）となり、征討の成功によって刑部侍郎となっている。侍郎は、今の日本でいえば、省の次官であるが、韓愈の時代には、長官たる尚書は名ばかりであり、侍郎が実権を握っていた。つまり法務大臣の地位である。

元和十四年、時の天子憲宗皇帝が、仏舍利を宮中に迎えさせられようとしたので、排仏の主張者韓愈は、「仏骨を論ずる表」を上って阻止しようとした。かなりわがままな君主であった憲宗皇帝は、その文中、仏教を奉じた君主の短命であることを述べたのに激怒して、韓愈を死刑にしようとしたが、重臣たち、中でも呉元済征討のときの司令官であった裴度（七六五―八三九年）などの取りなしで、潮州刺史に貶するだけで落着した。しかし、法務大臣から一地方官への左遷は、韓愈にひどい打撃を与えた。韓愈の予想し

た反響よりもずっとひどいお返しに、「仏骨を論ずる表」によつてもたらされたのである。この三度目の嶺南行が、彼れの詩に一つの時期を劃する。それは、この後、すでに元和十年頃から見られていた感傷の作がずっと多くなることである。元和期に見せた自信に満ちた作風よりも、もっと落ちついたあるいは沈痛な詩が増加する。抒情詩として見るとき、この時期の詩に、すぐれたものが多い。

潮州に流された韓愈は、その十月に袁州（今の江西省宜春県）刺史に転じ、翌十五年正月、憲宗皇帝が崩ずると、その年の九月、国子祭酒として長安に召還された。国立大学学長の地位である。ここでも、国子監の官として、中央に還つて来たことが、前回の陽山左遷のときと同様であるのは、興味深い。

その後中央の官吏として、勢力を持ち、ついに官吏の任免権を握る吏部の侍郎にまでなつた。長慶四年（八二四年）、五十七歳のとき、病気で退職し、その年の暮れ、薨じた。

韓退之と呼ぶのは、その字であり、韓昌黎と呼ぶのは、その自称した本籍であり、韓吏部と呼ぶのは、その最終官であり、韓文公と呼ぶのは、その諡である。

五

韓愈の詩文集は、「昌黎先生集」と呼ばれ、四十巻ある。また、ほかに外集十巻遺文一卷、門弟の李翱との共著による未完成の論語の注釈「論語筆解」二巻がある。

そのうち、詩は、集のはじめ十巻を占め、ほかに外集・遺文にもわずかある。全部で約四百首、ここを選んだのは、その十分の一強である。韓愈の作品のすべての方面になるべくわたりたいと思つたが、ただ一つ聯句といわれる、数人で句をつけながら詩を作つて行く様式のものだけは、収めることができなかった。

た。

聯句は、伝説上、漢の武帝（紀元前一四一―八七年在位）のときにはじまるといい、以来ずっと行われていたが、それは、遊戯の文字としてであった。形式は、おおむね、四句二韻ずつを一人で作り、同じ韻を用いて、次の人が作るというものであった。韓愈は、この形式に目をつけ、孟郊らとことばを煉り、形式にも変化を持たせようと試みた。それは、例えば、次のようなものである。

離別言無期

離別期無しと言え

会合意弥重張籍

会合意に弥よいよ重んず

病添兒女恋

病んでは兒女の恋を添い

老喪丈夫勇韓愈

老いては丈夫の勇を喪しう

劍心知未死

劍心知んぬ未だ死せざることを

詩思猶孤聳孟郊

詩思猶孤り聳ゆ

愁去劇箭飛

愁いの去ることは箭の飛ぶよりも劇しく

歛来若泉涌張徹

歛びの来たることは泉の涌くがごとし

に始まる「会合聯句」は、最初は、各人二句一韻ずつ附けているが、末は、四句二韻ずつで、その各人の附けて行く順序も、一定しない。もっとも技巧的なのは、韓愈が孟郊一人を相い手として行った「城南聯句」で、一人が対句の上の句を作ったのに、下の句を附け、更に次の上の句を作るといふ形式を取る。すなわち（上に括弧をつけたものが対となる）

遙岑出寸碧	搜尋得深行	流滑隨仄歩	翡翠開園英	瑠璃翦木葉	泉音玉淙琤	竹影金瑣碎
韓愈	韓愈	孟郊	韓愈	韓愈	韓愈	孟郊
遙かなる岑は寸かの碧を出だし	捜し求めて深き行びを得たり	流れ滑らかにして仄なる歩に随い	翡翠に園の英を開く	瑠璃に木の葉を翦り	泉の音は玉淙琤	竹の影は金瑣碎

………(下略)………

というふうで、わが国の連歌や連句と甚だ近い形式といわねばならない。しかし、聯句は、韓愈の作品を頂点としてふたたび衰えてしまった。しかも、韓愈の聯句にしても、彼れの文学全体から見れば、最もすぐれたものとはいえない。新しい文学形式を開こうとした点からいえば、重要であり、修辭の技巧にもすぐれたものがあるが、文学作品として享受するばあいには、他に一步を譲らねばなるまい。

また、韓愈が自分や友人の日日の生活をうたった詩を選ぶことが、比較的すくなかったが、その分は、吉川幸次郎教授の「新唐詩選統編」にいくつか収められているのを読んでいたきたい。「新唐詩選統編」に説いてある作品は、原則としてこの書物に収めない方針にしたが、あまりにも有名な「左遷されて藍闕に至り姪孫湘に示す」詩だけは、例外である。

テキストとしては、民国十七年（一九二八年）に影印（写真印刷）された宋の世綵堂刊本と、世綵堂本

の覆刻である明の東雅堂^{とうがどう}刊本とを用いた。大体同じなのであるが、世綵堂本は、影印のため、文字の消えているところがあったりしたので、東雅堂本を参考にしたのである。訓読には、和刻本の「韓柳文」に附せられた鵜飼^{うかい}石齋^{いせさい}（一六一五—一六六四年）の訓点を大いに参考としたが、そのまま従ったわけではない。（注釈中、旧訓というのは、この石齋点をさす。）

参考書として使用したのは、世綵堂本に付せられた宋の朱熹^{しゆき}（一一三〇—一二〇〇年）の考異、魏仲舉^{ぎちゆうきよ}の五百家注、及び和刻本「韓柳文」の原本である明の蔣之翘^{しやうしぎやう}の注のほか、清の顧嗣立^{こしりつ}（一六六九—一七二二年）の注、及びそのあるテキストに加えられた清の朱彝尊^{しゆいそん}（一六二九—一七〇九年）と何焯^{かしやく}（一六六一—一七二二年）の評、清の方世挙^{ほうせいきよ}（一六七五—一七五九年）の注である。また、日本人の著書としては、森槐南^{もりかいなん}（一八六三—一九一一年）「韓詩講義」（一九一五・六年 東京）と久保天随^{くぼてんずい}（一八七五—一九三四年）「統国訳漢文大成・韓退之詩集」（一九二八・九年 東京）が、ずい分役立った。誤まりもなくはないが、啓発されるところがかなりあった。鵜飼石齋とこの二先人の業にあつく感謝したい。

韓愈の詩について、更に多く読もうとする人は、森・久保両博士の書が入手し易く、便利であろう。久保博士の方には、全部の詩が収められているが、森博士の方は、詩集の五巻までである。なお、ヨーロッパ語に翻訳されたものとして、Erwin von Zach (1872—1942) によるドイツ語全訳 (Cambridge, Mass., U. S. A. 1952) があることをつけ加えておこう。

韓愈のテキストの説明や散文文学については、著者の「唐宋八家文（上）」（一九五六年東京 中国古典選之一）の韓愈の部分を見られたい。

巻頭図版として収めた韓愈の肖像は、故宮周刊第三百五十六期（北京、一九三四年六月）に載せられた